

# チェスを愛したロシアの作家たち

松 本 賢 信

## Russian Novelists Who Loved Chess

Kenshin Matsumoto

### Abstract

Chess is seldom described in Japanese literary works, as it is not very prevalent in Japan. However, we sometimes find impressive scenes of playing Go, which is also a board game, appear in Japanese literature. It is well known that Seishonagon and Murakishikibu played Go, and we find Soseki Natsume portrayed persons playing Go when we read, *I am a Cat* and *The Wayfarer*. Among all, *The Master of Go*, written by Yasunari Kawabata that directly settles on a Meijin, a battle between two Go masters, as a theme can be considered a literary masterpiece dealing with Go.

On the other hand, in Europe, chess often appears in literary works. *Through the Looking-Glass* written by Lewis Carroll and *The Royal Game* by Stefan Zweig treat chess as an important motif. In *The Defense* written by Vladimir Nabokov, Luzhin, in whom the embodiment of a chess player is finely made, is the hero. There are countless examples of works that portray persons playing chess or that refer to chess in metaphoric terms.

Originally, in Europe, chess was regarded as an important part of culture, and so there are many novelists and poets who played chess. In 19<sup>th</sup> century Russian literature, poets such as Pushkin and Lermontov, as well as novelists such as Turgenev, Tchernyshevsky, and Tolstoy were well known as chess lovers. In the 20<sup>th</sup> century, novelists such as Maksim Gorky and Vladimir Nabokov can be listed. Furthermore in France, literati such as Beaumarchais, Stendhal, André Gide, and Saint-Exupéry played chess. In other countries, major novelists who represented their

countries, such as Cervantes in Spain, Goethe in Germany, and Dickens in England, are said to have played chess.

In this thesis, I choose Pushkin, Turgenev and Tolstoy among the 19<sup>th</sup> century Russian novelists and examined how they worked on chess and how they depicted this game in their works using some specific information mainly from the viewpoint of literature study.

## はじめに

わが国ではチェスがそれほど普及していないため、純文学の作品中でチェスが描かれることは、ほとんど皆無であると言えよう。私は日本文学の専門家ではないが、同じボード・ゲームでも囲碁なら、重要な文学作品の中で、しばしば印象的な場面が描かれているように思われる。清少納言や紫式部が囲碁をたしなんだことはよく知られているし、近代以降では、たとえば夏目漱石の『吾輩は猫である』や『行人』などを読むと、作中人物が囲碁を打っている。そして何よりも、囲碁名人戦を直接の題材として作品化した川端康成の『名人』は、この種の文学の傑作と言ってよいであろう。

翻ってヨーロッパ文学では、チェスがしばしば登場する。ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』やシュテファン・ツヴァイクの『チェス・ノヴェル』《Schachnovelle》では、チェスが主要なモチーフとなっているし、私見によれば、チェスを描いたヨーロッパ文学の最高傑作は、ウラジーミル・ナボコフの『ルージン防衛』《Защита Лужина》であろう。その他、何らかの形でチェスに言及されている作品となると、枚挙に暇がない。

そもそもヨーロッパでは、チェスが重要な文化とみなされており、作家や詩人の中にもチェスをたしなんだ者が数多くいる。私が専門とする19世紀ロシア文学では、プーシキン、レールモントフ、ツルゲーネフ、チェルヌイシェーフスキー、トルストイといった作家たちがチェスの愛好者として知られているし、20世紀の作家では、マクシム・ゴーリキーやウラジー

ミル・ナボコフの名前を加えることができる。さらにフランスでは、ボーマルシェ、スタンダール、アンドレ・ジイド、サン＝テグジュペリといった文学者たちがチェスを指し、その他の国では、セルバンテス、ゲーテ、ディケンズといったそれぞれの国を代表するような大作家たちが、チェスを楽しんだと言われている。

そこで本稿では、19世紀ロシアの作家から、プーシキン、ツルゲーネフ、トルストイの三人を選び、彼らがどのようにチェスに取り組み、それぞれの作品の中で、このゲームをどのように形象化したかを見ることとしたい。

## 1. プーシキンとチェス

### 1-1 プーシキンの結婚と決闘

アレクサンドル・セルゲーエヴィチ・プーシキン (1799-1837) は、ロシアの最も偉大な詩人である。今でも国民詩人として、彼の作品は多くのロシア人によって読まれ、愛されている。プーシキンの父方は由緒ある貴族の家系に属しており、ロシア史をひもとくと、その先祖たちの名にしばしば出くわす。一方母方はアフリカの熱い血を引いており、アビシニア (エチオピア) 人で、ピョートル大帝の寵臣でもあったガンニバル將軍の孫娘がプーシキンの母である。

1811年、プーシキンはサンクト・ペテルブルグ近郊のツァールスコエ・セロー (Царское Село) に開設されたリツェイ (лицей)、すなわち帝政ロシアの男子貴族学校に入学した。彼は自由主義的な校風の中で、のびのびと学校生活を楽しみ、6年間にわたるリツェイ在学中に約150篇の詩を書いたとされている。

1817年、リツェイでの学校教育を終えた後、政府の官吏として外務省に勤務した。彼のいくつかの詩がペテルブルグからの追放を引き起こすまで、プーシキンは政府の官吏として仕えた。その後彼は決闘で亡くなるまで、多くの時間を詩や小説の創作活動に費やした。

文学史上、プーシキンの南方追放時代は、ロマン主義の開花期に当たり、それはバイロンの影響のもとに書かれた物語詩『カフカスの捕虜』*«Кавказский пленник»* や『バフチサライの泉』*«Фонтану Бахчисарайского дворца»* に結実している。その後、当局より要注意人物として母方の領地であるミハイロフスコエ村へ追放され、1826年まで地方官憲の監視下で謹慎生活を送ることになる。

1826年9月、プーシキンは「勅令により」迎えに来た伝令に伴われて、モスクワに召喚された。プーシキンはニコライ1世の「温情」によって自由の身とされたものの、実際は秘密警察の厳しい監視と検閲のもとに置かれた。当時社交界で、絶世の美女と評判の高かったナターリヤ・ゴンチャロワに恋をし、1831年2月に結婚する。その前年の秋、結婚祝いに父から譲られたニジェゴロド県ボロジノ村へと赴き、そこでは約50篇のさまざまなジャンルにわたる重要な作品を書いた。

多くの文学史家たちによって、ナターリヤとの結婚はプーシキンの悲劇の始まりを意味したものと解されている。幸福だったのは最初のうちだけで、二人の間には本当の心の通い合いはなかったと言われている。妻は夫の文学を理解できぬ女性であったが、その美貌ゆえに社交界の花であり、舞踏会には欠かせない存在であった。因みにチェス狂でもあったプーシキンは1832年9月、妻のナターリヤに、「いとしい妻よ、君がチェスを習ってくれていることに感謝する。落ち着いた家庭生活を営むためには、それは絶対に必要なものなのだ。いつかそれを証明しよう<sup>1)</sup>」と書いた手紙を送ったりもした。その後、プーシキンは34歳になって年少侍従に任ぜられ、ペテルブルグのアニチコフ宮殿勤務を命ぜられた。その背後には、夫に邪魔されず、ナターリヤを舞踏会に出そうとする皇帝の意図があったと言われている。結婚生活も宮仕えも、詩人を束縛するしがらみに他ならなかったが、にもかかわらず、プーシキンはこの勤務を利用して、皇帝所属の古文書を調べ、歴史を研究し、1833年に散文小説の傑作『大尉の娘』*«Капитанская дочка»* を書き始め、それと並行して『プガチョフ反乱史』

『История Пугачева』の執筆にも取り掛かったのである。歴史研究がプーシキンの創作において、極めて重要な意味を持ったことは、ここで改めて指摘するまでもない。

妻とフランス出身の近衛士官ジョルジュ・ダンテスとの不倫スキャンダルに巻き込まれたプーシキンは、1837年1月27日、ペテルブルグ郊外の雪原でダンテスと決闘を行い、腹部に銃弾を受け、その二日後に息を引き取った。プーシキンとダンテスとの決闘の経緯には、今日でも謎が多く、その全貌はいまだ明らかにされていない。皇帝と秘密警察長官が黙認したこの決闘の背後には、何か陰謀めいたものがあることを同時代の人々は感じていた。詩人レールモントフもその一人で、プーシキンの死を悼んで書いた『詩人の死』「Смерть поэта」と題する詩の中で、詩人特有の直感から、プーシキンの死は、貴族社会と専制政治の陰謀によってもたらされたものであることを見抜き、その怒りを決闘相手の異邦人ダンテスではなく、玉座の周辺にいる人々にぶつけて、彼らを「自由と天才と栄誉の首斬り役人」と呼んだ。

## 1-2 プーシキンとチェス

プーシキンがチェスを愛し、かなりの情熱を注いでこのゲームに取り組んでいたことが、最近の研究で明らかにされている。プーシキンが最初にチェスを覚えたのは、ツァールスコエ・セローのリツェイ通学時代のことらしいが、誰に、どのような形でそれを習ったのかははっきりしない。年を経るとともに、技量も向上し、最終的にはアマチュア愛好者としてはかなりの腕前に到達したと推察されるが、棋譜が残されていないため、プーシキンのチェスの実力を客観的に評価することはできない。現在チェスの公式戦では、各競技者に棋譜をつけることがルールで義務づけられているが、当時（19世紀前半）は、そのような慣習もなかったであろう。

前節でも少し触れたが、プーシキンはナターリヤ・ゴンチャローワと結婚し、彼女にチェスを覚えてくれるよう懇願したというエピソードがある。

幸福な家庭生活を営むために、チェスは必要不可欠のものと詩人は考えていたようだ。因みにナターリヤは相当の腕前に達し、ペテルブルグの社交界では、女性として最高の指し手にまでなったという同時代人の証言もある<sup>2)</sup>。

プーシキンは、かなり勝負にこだわるたちだったらしく、勝つと喜び、負けると非常に落ち込んだと言う。単にゲームに興じるだけでなく、チェスの理論的な側面にも関心を持ち、プーシキンの書斎には、チェスの専門誌や、1820年にパリで出版されたフランソワ・フィリドールの研究書『チェスの分析』《Analyse du jeu des échecs》、ロシア人で最初にチェス・マスターとなったアレクサンドル・ペトロフ（1794-1867）が書いた『系統化されたチェス』《Шахматная игра, приведенная в систематический порядок》などがあった。ペトロフの本は、直接著者からプーシキンに寄贈されたものである。また、フィリドールの本にはペンや鉛筆でさまざまな書き込みがなされており、プーシキンによってボロボロになるまで使用されたことが窺われる。そしてミハイロフスコエ幽閉時代に知り合ったアレクセイ・ヴーリフがプーシキンの主な対戦相手であった。結局ナターリヤの不倫スキャンダルに巻き込まれ、悲劇的な最期を遂げたプーシキンであるが、ダンテスとの決闘前夜も、この偉大な詩人はチェスを指して時間を過ごしたと言われている。

### 1-3 『エヴゲーニイ・オネーギン』に描かれたチェス

プーシキンの最高傑作は、言うまでもなく『エヴゲーニイ・オネーギン』である。この作品は韻文小説と呼ばれ、独特の形式を持っている。14行が一つのまとまり（これを「連」と言う）となっており、そのまとまり「連」がいくつか集まって「章」を成すという形で、全編が貫かれている。プーシキンの14行形式は西欧のソネット形式に発していて、シェークスピア・ソネットの新機軸をも取り入れた独特な形とすることができる。それは厳密な韻律、脚韻を守った整った詩形式であり、内容の面白さもさるこ

とながら、まさにこの形式の美しさ、まるで音楽のような言葉の響きとメロディー、——実はこの点にこそ、この作品の持つ最大の魅力があると言っても過言ではない。ロシア語を母国語とする人なら誰でも、『オネーギン』の一節をそらんじている。この作品を読む、ただそれだけのためでもロシア語を学ぶ価値がある、というのは故木村彰一先生の有名なセリフである。

さて、この『エヴゲーニイ・オネーギン』（第4章26連）の中に、登場人物がチェスを指すとても印象的な場面があるので、それを引用しよう。

彼はときどき、自然のことならシャトーブリアンよりももっと詳しく知っている作家の、教訓的な小説をオリガに読んで聞かせた。そんな場合彼は（おとめの心に危険な、空しいたわごとや作り話があると）、二、三ページ、顔をあからめて飛ばした。またふたりは、すべての人から遠く離れ、テーブルに肘を突きながら、じっと考え込んでチェス盤に向かうこともときどきあったが、そんな時レンスキーは、ほんやりして自分のルークをポーンで取ったりする。

日本語に訳すと、味も素っ気もない散文訳になってしまうが、ロシア語の原文は格調の高い韻文である。原文を引用して、その形式美を少し分析してみよう。

Он иногда читает Оле  
 Нравоучительный роман,  
 В котором автор знает боле  
 Природу, чем Шагобриан,  
 А между тем две, три страницы  
 (Пустые бредни, небылицы,  
 Опасные для сердца дев)  
 Он пропускает, покраснев.

Уединясь от всех далеко,  
 Они над шахматной доской,  
 На стол облокотясь, порой  
 Сидят, задумавшись глубоко,  
 И Ленский пешкою ладью  
 Берет в рассеянье свою.

まず指摘すべきは、『エヴゲーニイ・オネーギン』という作品全体がきれいな弱強格（ямб）で貫かれており、この連も例外でないということである。因みに9行目の *далеко*、12行目の *глубоко* は、ямб を維持するために、それぞれ第2音節にアクセントを置いて朗読すべきである。

次に1行目最後の単語 *Оле* と3行目の最後 *боле* とが韻を踏んでおり、しかもアクセントが最終から2番目の母音上にあり、女性韻（женская рифма）となっている。2行目と4行目の最後の単語 *роман* と *Шатобриан* も、韻を踏んでいるが、ここではアクセントが詩行の最後の母音にあり、男性韻（мужская рифма）となっている。その他、5行目と6行目（女性韻）、7行目と8行目（男性韻）、9行目と12行目（女性韻）、10行目と11行目（男性韻）、13行目と14行目（男性韻）の最後で韻が踏まれている。いささか専門的な話になるが、4行単位で見ると、最初の1～4行は abab の交互韻（перекрёстная рифма）、次の4行（5～8行）は aabb の平行韻（смежная рифма）、そしてその次の4行（9～12行）は abba の囲い韻（охватная рифма）となっている。さらに最後の余りの2行でも押韻されている。このような脚韻の構成は、ここに引用した連だけでなく、基本的には作品全体に踏襲されている。『エヴゲーニイ・オネーギン』の美しい言葉の響きは、このような整った詩形式の奏でるメロディーにはかならない。

さて、内容に関してだが、最後の2行は、「И Ленский пешкою ладью/  
Берет в рассеянье свою。」となっている。つまり、ここでレンスキーは

愛するオリガにうっとりするあまり、うかつにも、ポーンで自分のルークを取ってしまうのである。わが国で出版されているいくつかの翻訳では、こここのところを、レンスキーが相手の駒を取るかのように訳されているが、それは誤訳である。最後の *свою* は女性単数の対格形であり、前行の *ладью* にかかっている。韻を合わせるためのつけたしではあるまい。

ところで19世紀後半に活躍したロシアのジャーナリストで、『世界のイラスト』*«Всемирная Иллюстрация»* 誌の編集者でもあったイリヤ・シューモフは、1870年3月、同誌にレンスキーとオリガによって指されたチェスの一局を、『エヴゲーニイ・オネーギン』の内容に合わせて再現している。もちろんこの棋譜は、シューモフ自身の創作であるが、レンスキーが自分のルークを取ってしまうところまで忠実に再現しており、内容的にもユニークなので、ここでそれを、私自身のコメントを付して、紹介したい。白がレンスキー、黒がオリガである。

1.e4 e5 2.f4 ef

オープニングはキングズ・ギャンビットのアクセプトッド。現在ではほとんど指されなくなった定跡である。黒が正しく応じると、白の苦しい展開になる、というのが定説のようだ。

3.Nf3 g5 4.Bc4 g4 5.0-0 gf 6.d4?

ナイトを失った白としては、駒の展開の速さに期待するしかないが、ここでd4は疑問手だと思う。この局面では、Qf3とすべきで、以下、6...Qf6 7.c3 Nc6 8.d4 Nd4 9.Bf7+ Qf7 10.cd Bg7 といった展開が予想される。

6...fg?

黒のこの手も疑問。白からBf7以下の猛攻があるので、ここではいったんd5と指し、白がedと取ってきたら、それからfgとすべきであろう。

7.Bf7+ Kf7 8.Qh5+ Ke7 9.Rf4 Nf6 10.Rf6 Qe8!

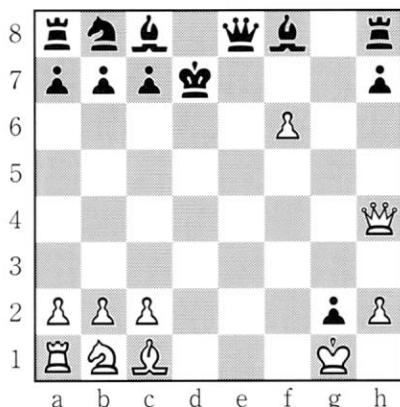
オリガの指したこの手は、この局面での黒の最善手と思われる。もちろんキングでルークを取ることはできない。白にBg5とされ、黒はクイーンを失ってしまう。

## 11.Qh4 d6 12.e5 de 13.de Kd7

ここが問題の局面である。レンスキーはオリガを愛するあまり、ほうつとしてしまい、e5のポーンで自分のルークを取ってしまう。現在の公式戦なら、競技者がルール上許されない着手をした場合、駒を元に戻すことが認められている。しかし、競技者の指がいったん駒に触れ、しかもその駒に有効な手がある場合、当該駒による着手が強制される。この局面でレンスキーが、ルークを取らずに、e5のポーンをe6に進めていたなら、私の研究によれば、白の必勝となる。なぜなら、ここでキングが逃げる手はない。c6やd6にキングが逃げたら、e7のディスカヴァード・チェック以下、白は簡単に勝ってしまう。ここはQe6とポーンを取る一手だが、以下、15.Qd4+ Ke8 16.Re6+ Be6 17.Qh8 Nd7 18.Qh7 Bc5+ 19.Kg2となって、白の駒得が大き過ぎ、明らかに白の勝勢である。

## 14.ef???

ところがレンスキーは自分のルークを取ってしまう。この大ボカによって、必勝の局面が必敗の局面（下図参照）になってしまったわけであるが、ここからのオリガの指しまわしがすばらしい。Bc5のチェック以下、6手で白のキングをメイトに打ち取ってしまう。



14...Bc5+ 15.Kg2 Qe2+ 16.Kg3 Bd6+ 17.Bf4 Rg8+ 18.Kh3 Kd8+

もちろん黒の勝ちは動かないので、Kd8 のディスカヴァード・チェックでもよいのだが、Qg2 とすれば即詰みである。

### 19.Qg4 Qg4x

双方に疑問手はあったものの、内容面ではユニークな、楽しい一局であったと言えよう。

## 2. ツルゲーネフとチェス

### 2-1 ツルゲーネフの生涯

イワン・セルゲーエヴィチ・ツルゲーネフ (1818-83) は、ヨーロッパ・ロシア中部のオリョール県に生まれた。父セルゲイは、古いタタールの血を引く胸甲騎兵隊の将校であった。一方リトアニア系の母ワルワラは、五千人余りの農奴を抱える大地主で、ツルゲーネフの幼年時代は彼女の所領であったスパースコエ・ルトヴィーノヴォ村で過ごされた。両親は経済的には裕福であったものの、屈折した性格を持つ母親と、美貌で伊達者の父親との家庭生活は落ち着かぬものであり、父の浮気、母の地主としての残酷な振る舞いなどの記憶は、『初恋』《Первая любовь》、『ムム』《Муму》といった作品に反映されている。

1833年から1841年にかけて、ツルゲーネフはモスクワ大学、ペテルブルグ大学、及びベルリン大学で、哲学、歴史、古典語などを修めた。特にベルリン留学時代は、ヘーゲルやゲーテを研究するかたわら、イタリアに遊学して、西欧美術に親しむなど、作家にとって実り多い時期で、後の彼の全ヨーロッパ的教養の基礎を学んだ。

帰国後ツルゲーネフは、哲学の教授になることを志したが、後に断念した。当時のロシア政府は大学の哲学講座を危険思想の温床と見なし、閉鎖したためである。その後内務省の官吏をやるかたわら、物語詩や小説、評論などを発表し、批評家のベリンスキーと交わるうちに、しだいに作家になる決意を固めていった。この間、生涯の恋人となるフランスのオペラ歌

手ポリーヌ・ヴィアルドー夫人と出会い、また母のお針子であった農奴イワノワとの間に娘も生まれている。

1847年、再度のドイツ滞在中に発表され始めた『獵人日記』《Записки охотника》シリーズが、ツルゲーネフの散文作家としての評価を確立した。フランス二月革命前後の経緯をパリで目撃した後、母の死（1850年）に際してロシアへ帰国し、広大な領地を兄と相続した。1856年に再び渡欧して以降は、短期間の一時帰国を除いて、生涯の大半を西ヨーロッパ（主としてパリとその近郊ブージヴァル、及びドイツの有名な保養地バーデン・バーデン）で、ヴィアルドー一家とともに過ごした。

1850年代中頃から60年代初頭にかけて、ツルゲーネフは『ルージン』《Рудин》から『父と子』《Отцы и дети》にいたる四つの長編を発表し、同時代の社会の描き手として高い名声を博した。しかし、同時に新世代人の評価をめぐる党派的論争に巻き込まれ、それまで行動をともにしていた『同時代人』《Современник》誌の左派批評家人たちと決裂するに至った。それ以降、彼のロシア文壇への影響力は急速に弱まったが、逆に欧米における評価は高まり、ゾラやモーパッサン、ゴンクール兄弟、フローベールら、フランス文壇人との交流を通じて、ロシア文芸の国際的紹介に大きく貢献した。晩年には、ロシア国内における彼の評価も再び高まり、1880年、モスクワで行われたプーシキン記念祭では、若者たちの熱狂的な歓迎を受けた。それまで仲たがいでいたドストエフスキーとも、このとき和解したと言われている。1883年、彼はブージヴァルのヴィアルドー夫人の別荘で、脊髄癌のため永眠した。

## 2-2 ツルゲーネフとチェス

ツルゲーネフは生涯チェスを愛し、文筆活動のかたわら、暇を見つけてはチェスを指していたと言われている。とりわけチェスの理論的な側面に興味を持ち、チェス雑誌に新手や新しい定跡が発表されると、それを自分で研究していたらしい。作家の書斎には、当時発行されたチェスの教科書

や定跡書などもいくつかあったと言う。それらは現在、オリョールのツルゲーネフ博物館に保存されている。<sup>5)</sup>

1852年春、ツルゲーネフは突然逮捕され、一か月の拘留の後、領地村にて一年半の「蟄居」を余儀なくされた。直接の理由は、ゴゴリの文学的功績を称えた追悼文『サンクト・ペテルブルグからの手紙』を『モスクワ通報』«Московский вестник»誌に載せたためとされているが、真因は『獵人日記』の農奴制批判に対する、当局の報復であったという説もある。それはともかく、ツルゲーネフはこの蟄居中、当時彼が購読していたイギリスのチェス雑誌«Chess Players Chronicle»の各号をじっくり熟読し、同誌に掲載されているほとんどすべての棋譜に、鉛筆で印がつけられており、熱心な研究の跡が窺われる。

ツルゲーネフは当時からチェスの強豪として知られ、ロシアの作家や文学者の間では最強の指し手であったことは疑いない。アレクセイ・トルストイやポロンスキーに勝ち、ネクラーフの住居で指されたレフ・トルストイとの一戦も、ツルゲーネフの2勝1敗だったらしいが、これらの棋譜が残されていないのは残念である。

ツルゲーネフはモルフィー、アンデルセン、シュタイニッツといった当時最高のチェスの指し手たちとも知己があり、しばしば外国のマスターたちとも対戦した。1862年、パリのカフェ・ド・ラ・レジャンス (Café de la Régence) で行われたトーナメントで、64名中2位の好成績を収めたりもしている (因みにこの大会の優勝者は、当時フランスの強豪選手として知られていたリヴィエールであった)。

また、ツルゲーネフは1861年にパリでポーランドのチェス・マスター、マチュスキーと対戦し、2勝4敗で敗れている。しかし、チェスのマスターと言え、プロ並みの実力の持ち主であるから、この成績は、逆にツルゲーネフの強さを証明していると言えよう。そのうちの一局、ツルゲーネフの見事な勝局を見てみよう。マチュスキーが白、ツルゲーネフが黒である。<sup>6)</sup>

1.d4 d5 2.c4 e6 3.Nc3 Bb4

オープニングはクイーンズ・ギャンビットのディクラインド。現在でもよく指される定跡の一つである。

4.f3 c5!

この局面では、私なら Nf6 としたいところだが、ツルゲーネフの指した c5 もいい手だと思う。

5.a3 Bc3+ 6.bc Qa5

ここでも、私なら Nf6 と指すが、Qa5 とはずいぶん積極的だ。

7.Bd2 Nf6 8.Qc2 Bd7 9.e4

ここからのツルゲーネフの攻めは見ごたえがある。

9...de 10.fe cd 11.cd Qh5 12.Nf3 Qg6!

放っておけば e4 のポーンが取られるし、ビショップでそれを守れば、g2 のポーンが落ちる。両者を見合いにしたツルゲーネフの好手。

13.Bd3 Qg2 14.Rf1 Nc6 15.0-0-0 Ng4 16.Rde1 h6?

緩手。このゲームで初めて見せたツルゲーネフの疑問手。ここは当然ナイトでポーンを取る一手であろう。16...Nh2 17.Nh2 Qh2 となって、黒は優勢を確立することができた。

17.d5?

ここで相手も間違えた。白としては e ファイルのポーンをついて、17.e5 Nf2 18.Be2 Nh3 とする方がまさった。

17...Nce5 18.Ne5 Ne5 19.Rg1 Qf3 20.Re3 Qf6 21.Bc3 Nd3+?

ツルゲーネフの二つ目の疑問手。この局面でナイトとビショップの交換を急ぐのは、いささか安易であろう。Rc8 がまさった。

22.Qd3 Qe7 23.Bg7 Rg8 24.Reg3 0-0-0 25.Qe3?

私なら喜んで、ビショップで h6 のポーンを取る。

25...b6 26.Qh6?

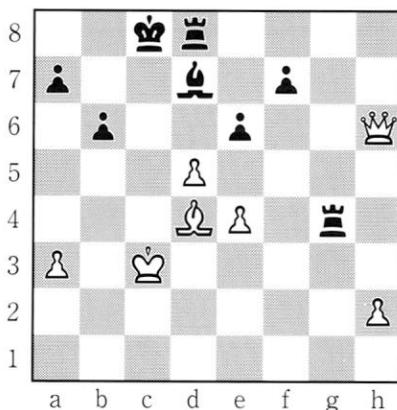
ポーンを一つ得したが、クイーンが中央の戦場を離れ、疑問である。

26...Qc5 27.Bd4?

この手は悪手であろう。ここではじっと Kb1、あるいは Qf6 と白が指していたら、このゲームはツルゲーネフの負けと思われる。

27...Qc4+ 28.Rc3 Rg1+ 29.Kd2 Qc3+ 30.Kc3 Rg4

この局面（下図参照）は、はっきりツルゲーネフの方が優勢であろう。クイーンは取られたものの、黒の二つのルークは、相手のクイーンより、ずっとよく働いている。



31.Qh5 Rf4 32.Qe5 Rf3+ 33.Kb2 Rg8 34.Bc3 Ba4 35.Qd4 Rg2+ 36.Bd2 Bd7 37.h4 Rff2 38.Kc3 Rd2!

ツルゲーネフに勝利をもたらした決め手。もしクイーンでルークを取って来たら、駒を総交換して、黒必勝の易しいエンディングになる。

39.Qh8+ Kb7 40.h5 ed 41.ed Rd5 42.h6 Bf5 43.Qf6 Rc2+ 44.Kb4 a5+ 45.Ka4

ここではいろいろな勝ち方がある。私だったら、Red2として、次に Bc2 のメイトを狙いたいところだ。

45...Rc7 46.Kb3 Rb5+ 47.Ka4 Bd7

ここで白が投了。若干の疑問手はあったものの、ツルゲーネフの会心譜と言えよう。

### 2-3 ツルゲーネフの作品に描かれたチェス

ツルゲーネフは生涯チェスを愛し、ロシアの文学者のあいだでは最強の指し手であったにもかかわらず、不思議なことに、自分の作品の中でチェスを描くことには消極的であったようだ。この点で、プーシキンやトルストイとは違っている。とは言え、彼のいくつかの作品では、主として副次的な登場人物がチェスを指しているし、印象的な比喩表現の中にチェスが組み込まれている例もある。例えば『父と子』の中に次のような描写がある。

「ちがう、ちがう！」パーヴェル・ペトロヴィチは突然堰を切ったように叫んだ。「君たちが正しくロシア民族を理解しているとは、私は信じたくない。君たちがロシア民族の要求や、その願望を代表しているなんて、信じられんのだ！ いや、ロシア民族は君たちが想像しているような、そんなものではない。ロシア民族は伝統を神聖なものとして崇めているし、家長制度を重んずる民族なのだ。信仰なくしては生きていけないのだ……」

「ぼくはそれに反論しようとは思いませんね」とバザーロフはさえぎった。「むしろその点ではあなたが正しいと、賛成してもいいとさえ思っています」

「だが、もし私の言うことが正しいなら……」

「でもやはり、それはなんの証明にもなりません」

「確かになんの証明にもなりませんよ」とアルカージイは確信をもって繰り返した。それは経験豊富なチェスの棋士が、見た目には危険な手を相手が指そうとしているのを予測し、それが故にいささかもひるむことがなかった、そのような確信であった。

原文は以下の通り。

— Нет, нет! — воскликнул с внезапным порывом Павел Петрович, — я не хочу верить, что вы, господа, точно знаете русский народ, что вы представители его потребностей, его стремлений! Нет, русский народ не такой, каким вы его воображаете. Он свято чтит предания, он — патриархальный, он не может жить без веры...

— Я не стану против этого спорить, — перебил Базаров, — я даже готов согласиться, что в этом вы правы.

— А если я прав...

— И все-таки это ничего не доказывает.

— Именно ничего не доказывает, — повторил Аркадий с уверенностью опытного шахматного игрока, который предвидел опасный, по видимому, ход противника и потому несколько не смутился.<sup>7)</sup>

パーヴェル・ペトローヴィチとバザーロフの間で激論が始まるや、子の世代の代表として、アルカージイはバザーロフを援護射撃する。「確かになんの証明にもなりませんよ」と彼が確信をもって言うとき、その確信とは、経験豊かなチェスの棋士が相手の危険な手を読みきったときに感じるような確信であると、ツルゲーネフは描写しているわけである。このような何気ない描写の中に、的確な比喩表現を導入するところに、通俗的な小説家とは違った、ツルゲーネフの作家としての力量を感じさせられる。

### 3. トルストイとチェス

#### 3-1 トルストイの前半生——『戦争と平和』に至るまで

レフ・ニコラーエヴィチ・トルストイ (1828-1910) は、伯爵家の四男として、モスクワから南方へ190キロほど離れたヤースナヤ・ポリャーナで

生まれた。2歳のときに母を亡くし、9歳で父と死別したが、叔母たちの後見のもとで過ごされた幼年時代は、概して安穏で幸福なものであり、作家にとってこの幼い時代の思い出は、穢れを知らぬ、幸せな「黄金時代」として、後に絶えず想起されることとなる。父の死後、1841年に叔母の領地があったカザンに移り、1844年カザン大学東洋学部に入學した。トルストイはアラビア・トルコ語学科を選んだが、その保守的な教授法になじむことができず、後に法学部に転じたものの、ヤースナヤ・ポリャーナの領地を相続したのを機会に、大学に強制されないで勉強したいという希望から中退し、以後は領地経営や、農民のための学校の開設といった仕事に取り組むことになる。

トルストイ文学の大きな特徴は、「自伝的」であるということにある。それは「日記」をつける習慣や、自己を絶えず凝視し、観察するという、彼のいささか病的な性癖と切り離すことはできない。トルストイが書いた膨大な量の日記は、大学時代のものから残っているが、理想の追求、自己反省、厳しい自己啓発というトルストイ文学の特質は、すでに初期の日記の中に、はっきりと見て取ることができる。

1851年、領地での生活に飽きたトルストイは、カフカスで従軍していた兄のもとに行き、翌年下士官の採用試験を受けて合格し、正規の砲兵下士官となった。自伝文学中の傑作とされるトルストイの処女作『幼年時代』*«Детство»* (1852) はこの時期に書かれたもので、『同時代人』*«Современник»* 誌に発表され、世の注目を浴びた。1856年、軍務を離れたトルストイは文学を自分の天職とみなし、創作に専念するようになる。1857年に『青年時代』*«Юность»* を書き上げ、さらに『コサック』*«Казачи»* に取りかかった。クリミア戦争にも従軍し、その戦争記録である『セヴァストーポリ物語』*«Севастопольские рассказы»* (1855-56) は、彼の作家としての名声を不動のものにしたと言える。その後トルストイはペテルブルグに出て、ツルゲーネフ、グリゴローヴィチ、ネクラソフといった作家たちともつき合うが、これら『同時代人』誌グループを中心とする旧世代

の作家たちとはそりが合わず、やがて首都を去り、自分の生き方を模索する苦悩の日々が続いた。そんな中で農地経営や農民教育の仕事にも力を注いだものの、結局はうまく行かなかった。

トルストイが二度にわたって西欧旅行（1857、1860-61年）を試みたのも、自分の生きる道を求める模索の試みであったと言えよう。一回目の西欧旅行では、パリのギロチンによる公開処刑から受けた残酷な印象と、ルツェルンでの不愉快な経験（イギリスの観光客が大道芸人を侮辱したのをトルストイは目撃したらしい）が、それまでトルストイが文明社会に対して抱いていた疑念を一層つのらせることとなった。二回目の旅では、ツルゲーネフ、ゲルツェン、ブルードン、マシュウ・アーノルドらに会い、各地の小学校や幼稚園を見学して歩いた。旅の途中で療養中の兄ニコライの死をみとったが、この兄の死が与えた衝撃は、トルストイの生涯における、思想上きわめて重大な転回点となったと考えられている。肉体の活力や生命力の本能的な発露を肯定し、それに信仰に近い感覚を寄せていたトルストイにとって、生の喜びを脅かす死の恐怖は、「生」を根底から揺るがすものと思われた。死の恐怖は生の意味への疑念を深めさせ、ついには後年の宗教的回心をもたらすに至ったと言えよう。

1862年、医師ベルスの次女ソフィヤと結婚したトルストイは、家庭の幸福に満たされた、精神的にも金銭的にも安定した生活に入った。家事を取り仕切り、夫の作品を何回となく清書し、13人の子を生んだ妻の献身の上に、家庭生活の叙事詩、家族の記録とも言うべき『戦争と平和』《Война и мир》（1865-69）が生まれたのである。

### 3-2 トルストイとチェス

トルストイが大のチェス好きであったことは有名である。彼は青年将校としてカフカスに二年ほど勤務したが、チェスに熱中したことが原因で、聖ゲオルギー十字章をもらい損ねたというエピソードがある。トルストイの軍人としての勇敢な行為に対して、聖ゲオルギー十字章の受勲が予定さ

れていたのだが、ある日、哨兵勤務を命ぜられたとき、彼は歩哨に立つ代わりに、夜更けまでチェスを指していた。そして師団の上官がそれに気づき、逮捕を命じた。結局、このトルストイの職務怠慢行為に対する処分として、逮捕は免れたものの、彼は聖ゲオルギー章受勲の権利を失ってしまった。

ある書簡の中でも、トルストイは「私はチェスと本と狩りのない生活を想像できない<sup>8)</sup>」と告白している。トルストイが若い頃からチェスに熱心に取り組んだことは、彼の日記を見てもわかる。そこには、彼が誰と対戦したか、チェスにどれくらい時間を割いたか、克明に記されている。多いときは、一日に三時間もチェスの研究に費やしている。晩年には、チェスが日課の一項目となり、文字通り毎日、一定の時間になると（たいていは夕方）、作家はチェスを指した。トルストイが最も多く対戦した相手は、ピアニストのホルデンワイザー（А. Гольденвейзер）であり、15年間にわたって600局以上も指している。

ところでトルストイのチェスの実力はどの程度だったのであろうか。彼が残した棋譜はいくつか現存しており、ここではその最も有名なものを検討するとしよう。対戦相手は、トルストイの作品の英語への翻訳を担当し、二巻本の伝記の編集者でもあったモード（Э. Моод）<sup>9)</sup>であり、1906年にヤースナヤ・ポリャーナで指された一局である。

1.e4 e5 2.f4 ef 3.Nf3 g5 4.Bc4 g4 5.Ne5

オープニングはキングズ・ギャンビットのアクセプトッド。本稿第1章で見たレンスキーとオリガの対局と同じ出だしである。ただし、黒の4手目 g4 に対し、レンスキーはキャスリングをしてナイトを犠牲にしたが、トルストイは Ne5 と逃げた。

5...Qh4+ 6.Kf1 d5

黒の d5 は定跡にない手。ここでの定跡は、Nc6 か Nh6。f3 もあり得る。たとえば Nc6 に対しては、7.Nf7 Bc5 8.Qe1 g3 9.Nh8 Bf2 10.Qd1 Nf6 11.d4 d5 12.ed Bg4 13.Be2 Nd4 といった展開が予想されるが、少し白が苦しいで

7.Bd5 f3 8.gf Qh3+ 9.Ke1

トルストイはキングを e1 に逃がしたが、f2 や g1 に逃げる手も成立すると思われる。たとえば Kf2 の後、9...Nh6 10.d4 f6 11.Nd3 gf 12.Ke1 Bd6 といった展開が予想される。

9...g3 10.d4?

トルストイの指したこの手は疑問手。c1 のビショップを使うため、d4 と指したのであるが、次の Qg2 が厳しすぎる。それを防いで、ここでは Qe2 の一手。

10...g2??

この手は大緩手。ここでは当然 Qg2 とすべきで、以後 11.Rf1 gh 12.Bf7+ Kd8 13.Bc4 Be7 14.Nf7+ Ke8 15.Qe2 h1→Q 16.Rh1 Qh1+ 17.Kd2 Nh6 18.Nh8 Bg5+となり、黒の圧倒的優勢の局面と思われる。

11.Rg1?

相手のミスで命拾いしたトルストイであるが、この手も疑問手。ルークが逃げる前に、Bf7+ のチェックを入れたかった。以下 11...Kd8 12.Rg1 Qh2 13.Kf2 Qh4+ 14.Ke2 Bh3 15.Nc3 Bh6 16.Bh6 Qh6 といった進行が予想され、形勢不明だが、少なくとも本譜よりは、白にとって好ましい展開であろう。

11...Qh4+

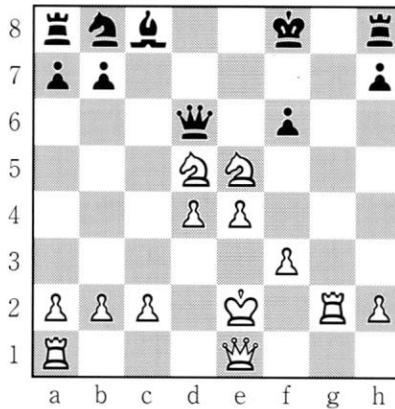
私だったら、Qh4 とチェックする前に Nh6 として、白からのチェック Bf7 を防いでおきたい。

12.Ke2 Nh6 13.Rg2 c6 14.Bh6 cd 15.Bf8 Kf8 16.Qe1 Qe7 17.Nc3 f6

ここではすでに、白が優勢のようだ。黒が f6 の代わりに Nc6 としても、以下 18.Qg3 Nd4+ 19.Kd1 Ne6 20.ed となって、白の勝勢である。

18.Nd5 Qd6

すでに白優勢の局面（次図参照）であるが、ここでトルストイに好手が出る。もちろん e5 のナイトが逃げたりはしない。



19.Qg3!

次に Qg7 のチェックと Ng6 のチェックを見合いにしたいい手だ。トルストイの実力を示している。

19...fe 20.Qg7+ Ke8 21.Qh8+

ここで黒が投了。いくつか疑問手はあったものの、攻めの好手もあり、なかなか見どころの多い一局であったと言えよう。

### 3-3 『戦争と平和』に描かれたチェス

トルストイは、チェスを直接のモチーフとした作品こそ書いていないが、自分の作品の中で、さまざまなレベルでチェスにかかわっている。文学的見地から最も重要なのは、比喩表現の中でチェスに言及されているケースであろう。『戦争と平和』の中から、二つほど具体例を見ることにしよう。後の考察の便宜を図るため、まず原文を引用し、その後に拙訳を載せる。

В то время как это происходило в Петербурге, французы уже прошли Смоленск и все ближе и ближе подвигались к Москве. Историк Наполеона Тьер, так же, как и другие историки Наполеона, говорит, стараясь оправдать своего героя, что Наполеон был

引誘されて、フランス兵は、モスクワの城壁へ引き寄せられて行ったのは、彼の意思によるものではなかった、と述べている。歴史的事件の解明を一個人の意思に求めようとするすべての歴史家たちが正しいと言うのと同じ程度に、彼も正しい。ロシアの歴史家たちが、ナポレオンはロシアの司令官たちの作戦によってモスクワへ誘いこまれたのだと主張するのと同様、彼も正しいのである。ここには、過去のすべてを、すでに起こった事実に対する準

[拙訳] ベテルブルグでこんなことが起こっていたときに、フランス兵はすでにモスクワを過ぎて、しだいにモスクワに近づきつつあった。ナポレオン専門の歴史研究者であるティエールは、他のナポレオン研究者たちと同じように、自分の英雄を弁護しようとするあまり、ナポレオンがモスクワの城壁へ引き寄せられて行ったのは、彼の意思によるものではなかった、と述べている。歴史的事件の解明を一個人の意思に求めようとするすべての歴史家たちが正しいと言うのと同じ程度に、彼も正しい。ロシアの歴史家たちが、ナポレオンはロシアの司令官たちの作戦によってモスクワへ誘いこまれたのだと主張するのと同様、彼も正しいのである。ここには、過去のすべてを、すでに起こった事実に対する準

備と見る因果（回帰）の法則のほか、あらゆることを混乱させようとする相関関係というものが存在している。上手な指し手でも、チェスに負けると、それは自分の手に誤りがあったためだと思い込んでいる。そしてその誤りを序盤戦に見いだそうとつとめるのだが、勝負のあいだの一手一手に、やはり同じような誤りがあり、一手も完全に進められていなかったことを忘れているのだ。彼が注意を向ける自分の悪手は、それが相手に利用されたがために、はじめて気がつくものである。時間の一定の条件の中で行われ、一つの意思がいくつかの生命のない機械を動かすというのではなく、すべてが雑多な恣意の無数の衝突から生まれる戦争というゲームは、その複雑なことはチェスの比ではない。

ここで用いられているのは、文学的にはアナロジー（аналогия）の手法であり、戦争をチェスにたとえて論じている。このような発想はわが国にもあり、たとえば戦国時代の武将が自分の兵と相手方の兵を将棋の駒に見立てて、双方の戦力を分析し、作戦を練るといったシーンは戦記ものなどでしばしばお目にかかる場所である。それはともかく、トルストイも指摘しているように、チェスの指し手は自分が負けた場合、その敗因を序盤戦にまでさかのぼって見つけようとする傾向がある。ただ自分の悪手は、相手に利用された場合には気づくが、そうでない場合は気づきにくいものである。知らない間にお互い悪手ばかり指していたというケースも、まま生じるのであり、こんなところにチェスというゲームの難しさがある。また、これもトルストイが正当にも指摘していることだが、チェスと戦争との間には相違点もある。つまり、チェスの駒がどこに動くかは、指し手の意思に完全に依存する。それに対して戦争では、実際に戦っている兵士たちは、一人一人が意思を持った人間であるがゆえに、必ずしも司令官の命ずるとおりに行動するとは限らない。戦争というゲームの複雑さを、チェスと対比させることによって、トルストイは見事に描写していると言えるであろう。もう一か所引用する。

Пьер с удивлением посмотрел на него.

— Однако, — сказал он, — ведь говорят же, что война подобна шахматной игре.

— Да, — сказал князь Андрей, — только с тою маленькою разницей, что в шахматах над каждым шагом ты можешь думать сколько угодно, что ты там вне условий времени, и еще с той разницей, что конь всегда сильнее пешки и две пешки всегда сильнее одной, а на войне один батальон иногда сильнее дивизии, а иногда слабее роты. Относительная сила войск никому не может быть известна. Поверь мне, — скаал он, — что ежели бы что зависело от распоряжений штабов, то я бы был там и делал бы распоряжения, а вместо того я имею честь служить здесь, в полку вот с этими господами, и считаю, что от нас действительно будет зависеть завтрашний день, а не от них... Успех никогда не зависел и не будет зависеть ни от позиции, ни от вооружения, ни даже от числа; а уж меньше всего от позиции.<sup>11)</sup>

[拙訳] ピエールはびっくりして彼を見た。

「でも」と彼は言った。「話だと、戦争はチェスみたいなものだということじゃありませんか」

「そうだよ」とアンドレイ公爵は言った。「わずかに違いがあるとすれば、チェスならどの駒を動かすにもどれだけの時間でも好きなだけ考えられる。つまり時間の条件の外にあるということと、もう一つはナイトは常にポーンよりも強く、二つのポーンは一つよりも強いと決まっていることくらいかな。ところが戦争では一個大隊がときには一個師団より強いことがあるし、またときには一個中隊よりも弱いことがある。両軍の相対的な力というものは誰も知り得ない。ほくは断言するが」と彼は言った。「もしすべてが司令部の命令によって決せられるのだったら、

ぼくは司令部に勤めて、命令を出していただろうね。ところがぼくはここで、連隊に、これらの諸君とともに勤務する光栄を選び、明日を決するのは実際にわれわれであって、彼らではない、と考えている……。成功が陣地によっても、武器によっても、兵の数によつてすら決せられたことは、過去にも一度もなかったし、これからもないだろう。なかでも陣地などもっとも小さな要因さ」

ここでもトルストイは、アンドレイ公爵の口を借りて、戦争をチェスと比較して論じている。いかにもチェスが好きだったトルストイらしい描写であると言える。しかし、「チェスならどの駒を動かすにもどれだけの時間でも好きなだけ考えられる」というアンドレイ公爵の見解は、現代のチェスには当てはまらない。現在では、チェスの公式戦はすべて厳しい時間制限のコントロールのもとに置かれており、勝ち負けのはっきりしない局面で時間切れとなった場合、たとえ優勢であっても、そのプレイヤーの負けとなる。また、「ナイトは常にポーンよりも強く、二つのポーンは一つよりも強いと決まっている」というのも正しくない。エンディングにおいては、ポーンがナイトよりも強いケースはしばしば生じるし、クイーンへの昇格が約束された一つのポーンは、昇格の見込みのない二つのポーンよりはるかに強いからである。

いずれにせよ、的確な比喩表現はトルストイの最も得意とするところであり、チェスを愛した作家であるだけに、しばしばチェスが引き合いに出されるのは興味深い現象と言えよう。

#### むすびにかえて

以上、19世紀のロシア文学を代表する三人の作家とチェスとの係わり合いを見てきたが、私がこれまでに調べた文献から総合的に判断すると、やはりツルゲーネフの実力が群を抜いていると思われる。本稿に引用した棋

譜を見ても、彼は相当先の局面まで想定した上で、着手を選んでいる。ブーシキンの指した棋譜が現存しないため、この大詩人の実力を客観的に評価することができないのであるが、ウラジーミル・ナボコフは『エヴゲーニイ・オネーギン』の注釈書の中で、チェスの実力は、レフ・トルストイの方が上であると述べている。<sup>12)</sup>

今回は19世紀の作家に限定して検討したが、「文学とチェス」というテーマでは、やはり20世紀の亡命作家であるナボコフを無視するわけにはいかないだろう。チェスを主要テーマとし、しかもロシア語で書かれた作品として、『ルージン防御』は極めて興味深い対象である。いずれ機会を見つけて、この作品を論じてみたい。

私は平成13年度から、亜細亜大学の授業において「テーマ研究」を担当している。初年度は「亡命文学研究」というテーマで、イワン・ブーニンやナボコフの作品を扱い、『ルージン防御』の英訳版である「The Defense」も、苦勞しながら、学生たちと一緒に読んだ。受講生がロシア語の履修者でなかったため、ロシア語の原書ではなく、英訳版を用いたのであるが、非常に難解なテキストであった。それでも主人公ルージンのいささか歪曲されたチェス・プレイヤーとしてのイメージが学生の興味を引いたらしく、いつの間にかチェスというゲームそのものに、彼らの関心も移って行った。平成14年度からは「文学とチェス」というテーマのもとに11人の学生が集まり、チェスの実戦を楽しみながら、この大きなテーマについて考えている。彼らがどんなレポートを書くか、今から楽しみである。

ところで、今回の研究に際し、ロシア文学の翻訳に接してみて、チェスの記述に関しては、相当問題のあることがわかった。『エヴゲーニイ・オネーギン』の誤訳に関しては本文でも指摘したが、その他、ツルゲーネフの『父と子』や『ルージン』、トルストイの『戦争と平和』といった作品の中で、ことごとく誤訳しているのである。翻訳の大家と言われる人たちがチェス(шахматы)とチェッカー(шашки)を区別せず、шахматыを平気で「西洋将棋」などと訳している。ポーン、ナイト、ルークといった

駒の名称も正確に訳されていない。わが国でチェスが普及していないことも、これらの誤訳の一因と思われるが、やはり直して行くべきであろう。私もロシア文学者を名乗る以上、質の高い翻訳を世の中に一つずつ出して行かねばならないと思っている。それが私の余生に課せられた義務なのかもしれない。

## 注

- 1) 1832年9月30日頃、モスクワからペテルブルグにいた妻に宛てて、プーシキンはこの手紙を書いている。  
[http://www.rvb.ru/pushkin/01text/10letters/1831\\_37/01text/1832/1687\\_499.htm](http://www.rvb.ru/pushkin/01text/10letters/1831_37/01text/1832/1687_499.htm) 参照。  
 原文は以下の通り。  
 «Благодарю, душа моя, за то, что в шахматы учишься. Это непременно нужно во всяком благоустроенном семействе; докажу после».
- 2) <http://www.infosport.ru/press/szr/1999N1-2/p60-61.htm> 参照。
- 3) Пушкин А. С. «Сочинения в трех томах». Т. 2. Художественная литература, Москва. 1986. С. 250.
- 4) Линдер И. М. «Пушкин, любовь и шахматы». Антидор, Москва. 1999. С. 250.
- 5) <http://www.versti.ru/archiv/html/1999/92/sport.htm> 参照。
- 6) <http://www.totalchess.spb.ru/History/History.htm> 8-11頁参照。
- 7) Тургенев И. С. «Собрание сочинений в двенадцати томах». Т. 3. Художественная литература, Москва. 1954. С. 214.
- 8) «Я не могу представить себе жизнь без шахмат, книг и охоты».
- 9) <http://www.totalchess.spb.ru/History/History.htm> 7-8 頁参照。
- 10) Толстой Л. Н. «Война и мир». Т. 3. Эксмо-Пресс, Москва. 2001. С. 132-133.
- 11) Там же, С. 206.
- 12) Набоков В. В. Комментарий к роману А. С. Пушкина «Евгений Онегин». Искусство-СПб, Санкт-Петербург. 1998. С. 363.

## 参考文献

- 川端香男里著 『ロシア文学史』 岩波書店 1986年  
 川端香男里編 『ロシア文学史』 東京大学出版会 1986年  
 小野理子他著 『新版ロシア文学案内』 岩波書店 2000年  
 フランソ・ル・リヨネ著 成相恭二訳 『チェスの本』 白水社 1977年  
 Линдер И. М. «Пушкин, любовь и шахматы». Антидор, Москва. 1999.  
 Пушкин А. С. «Сочинения в трех томах». Т. 2. Художественная литература, Москва. 1986.

Тургенев И. С. «Собрание сочинений в двенадцати томах». Т. 3.

Художественная литература, Москва. 1954.

Толстой Л. Н. «Война и мир». Т. 3. Эксмо-Пресс, Москва. 2001.

Набоков В. В. Комментарий к роману А. С. Пушкина «Евгений Онегин».

Искусство-СПб, Санкт-Петербург. 1998.

その他、インターネットのサイトに関しては、それぞれの注を参照のこと。